

## 普及センターだより 262号

消費者と生産者のこころを結ぶ

### 地産池消交流会 i n 山武

平成 15 年 10 月 1 4 日、大網白里町において、指導農業士会山武支部、農業士会山武支部と山武普及センターの主催（大網白里町後援）により「山武郡市の農産物を消費者に知ってもらい、活用してもらおう」をテーマに「地産池消交流会」を開催しました。



参加者は、消費者代表として各町の食生活改善協議会員、及び指導農業士、農業士、町農家生活改善研究会員と関係機関の計 7 5 名でした。



午前中は、白里直売所、板倉静雄氏ほ場、JA山武郡市集出荷センターの3カ所を視察しました。昼食は、農家生活改善研究会員が、地元の農産物を活用した料理に舌鼓を打ちました。研究会員に直接レシピを聞き、メモをとる参加者の姿が多く見られました。午後からは、視察の感想や、日頃地場農産物について考えていることを、それぞれの立場から発言し合い活発な

意見交換となりました。

今回初めて取り組んだ交流の輪が大きく広がり、より山武地域の地産池消が推進されるとともに、地域農業の活性化につながることを期待されます。



# 平成 15 年産稲作をふりかえって

## 1 忘れた頃にやってきた低温害！！

田植え以降 5 月から 6 月の気温は平年並みか、やや高く過ぎましたが、全般にやや日照不足傾向で軟弱な稲となる。又一部未分解の稲わら等によるガス害により生育を抑え、初期茎数確保の遅れの原因ともなった。このため 6 月中旬には“葉いもち病”の発生が始まった。

その後の生育は、早生品種は平年並みで 6 月 18 日～22 日に、コシカは平年よりやや早く（3 日程度）幼穂形成期に入った。その後オホーツク海高気圧の張り出しにより低温（7 月 8 日～23 日 平均気温 18.5～19.4 度）となり低温害が心配されたが、不稔朶の発生には至らなかった。しかし郡市内全域に葉いもち病が多発し、一部葉鞘褐変症状（止葉の葉鞘が褐変し穂も褐変）も発生した。

8 月も引き続き低温日照不足で海岸地帯を中心に穂いもち病(枝梗・穂首)が多発し収量に大きな影響を与えた。（さらに 8 月 15 日 16 日を中心とした大雨によりいもち病が助長されたことと合わせ収穫が 8 日程度遅れた。）

このように低温寡照により、稲体の消耗が少なかったことが又登熟期間が延びたことが粒の充実減少への影響は少なくなった。

以上のように平成 5 年の冷害を思わせる 7 月 8 月の天候となり、その影響は地域によって又栽培管理により差が出た。

\* 収量構成要素の平年との比較

作柄調査圃より

品種	年度	m <sup>2</sup> 当り 穂数	一穂 朶数	m <sup>2</sup> 当り粒 数	登熟歩 合%	不稔歩 合%	千粒重 g	10 a 収量 kg
ふさおとめ (大網白里町)	平年	464	65	30160	87.9	4.2	23.0	604
	15 年	418	67	28006	82.5	3.4	22.5	519
ひとめぼれ (東金市)	平年	523	62	32426	92	3.3	22.1	654
	15 年	465	63	29295	86.9	3.8	21.2	548
コシカ (成東町)	平年	410	84	34440	84	7.1	21.8	625
	15 年	335	83	27800	85.9	6.4	21.1	543

上記の表により 15 年の「稲のすがた」をみると登熟歩合、千粒重の落ち込み少なかったが初期生育が遅れた分、穂数とはれず、朶数も確保しきれず収量は落ち込んだ。又病害（いもち病等）の発生により収量減となった。

## 2 気象変動に対応した米作りが課題

14 年は 8 月の高温による登熟不良と品質低下が問題となり、今年は低温日照不足の影響による減収等、年により変動が激しくなっている。気象変動に柔軟に対応できる米づくりが課題となる。基本にかえて以下の 3 点に注意し栽培方法を設計し見直してみてください。特に昨年、今年とも地力の有無が分かれ目となり施肥改善と土作りが課題です。

その1 早期茎数の確保と無効分けつの抑制

健全苗(特に厚まきに注意!)と基肥のやりすぎに注意!

秋耕と排水対策 初期生育を抑える未分解稲わらを残さない

その2 根の活力を落とさない水管理

田植え後、天候をみて浅水管理(地温を上げて活着促進、茎数確保)

中干しの徹底(茎数8割確保したら速やかに実施、土壌酸化促進)

登熟期の水管理(出穂前後の間断かん水特に高温時や乾燥風が吹くときは  
要注意!)

その3 土作り

作土の確保、15cm(近年作業の効率化が優先され作土が浅くなっています。)

堆肥投入による土作り

ジワジワと効く地力窒素が異常気象の影響を受けにくい稲になります(乾田  
の砂質ほ場で1t/10a、半湿田砂質ほ場で0.5t/10a)

追伸 15年は郡市内で航空防除が実施されなくなり、それに対応する体制作りが各市  
町村植物防疫協会で行なわれています。普及センターではとくに「発生予察による無駄の  
ない防除」を行なうため調査支援を行なってきました。各地域でカメムシの発生を見極め  
て無駄のない対策を行なう必要があります。

カメムシ発生調査は、各市町村協会ごとに7月に3回のほ場調査と広報による情報発信、  
収穫後の玄米被害調査(各市町村10~20箇所)を行ないました。今後も継続して行なう予  
定です。

## あなたならどうする? 「今どきのライフスタイル」

成東町農業・農村男女共同参画推進協議会の懇談会が11月7日にのぎくプラザで開催されました。参集者は、農業委員、議員、農業者、後継者と様々な年代層の方が50名ほど参加しました。

やってみたい座(女性推進員)による寸劇「今どきのライフスタイル」に続き、松本市在住の酪農家小沢禎一氏の講演「家族が元気になるコツ教えます」では、夫・妻・後継者とその妻がいかに楽しく暮らすかを経験に基づいておもしろく話され、笑いの渦となりました。



家族がその時々に合わせて役割をもち、個性を尊重した暮らしができれば、家族みんなが元気になるよ……と。その手段として家族経営協定、我が家の家訓、ルールづくりをすすめていました。



懇談会には、父母が母屋を出るとき、介護は家族でが基本、これからはどんな農業をすべきかなどの意見が活発に出されました。一人一人が互いを認め合い、もてる能力を発揮しあってよりよい社会・暮らしを実現するため、男女(とも)に考える貴重な時間となりました。

# イチジクの開園について

## 一 植え付け時期

イチジク（榊井ドーフィン）は、冬の寒さと乾燥に弱いので、三月上旬～中旬に植え付けます。

## 二 植栽間隔

イチジクは、早期成園化・作業能率向上のために、密植栽培による一文字整枝を導入します。植栽間隔は、ほ場の肥沃度にもよりますが、株間4～6m・畝間2～2.5m程度が良いでしょう。

## 三 植え付け方法

イチジクは、土壌酸度（PH）が七程度の中性がよいので、土性改善のためにあらかじめ、10アール当たり苦土石灰200kgと完熟堆肥を2トン全面散布しておきます。畝は、土壌の排水条件に応じて高さ30cm以上の高畝とします。

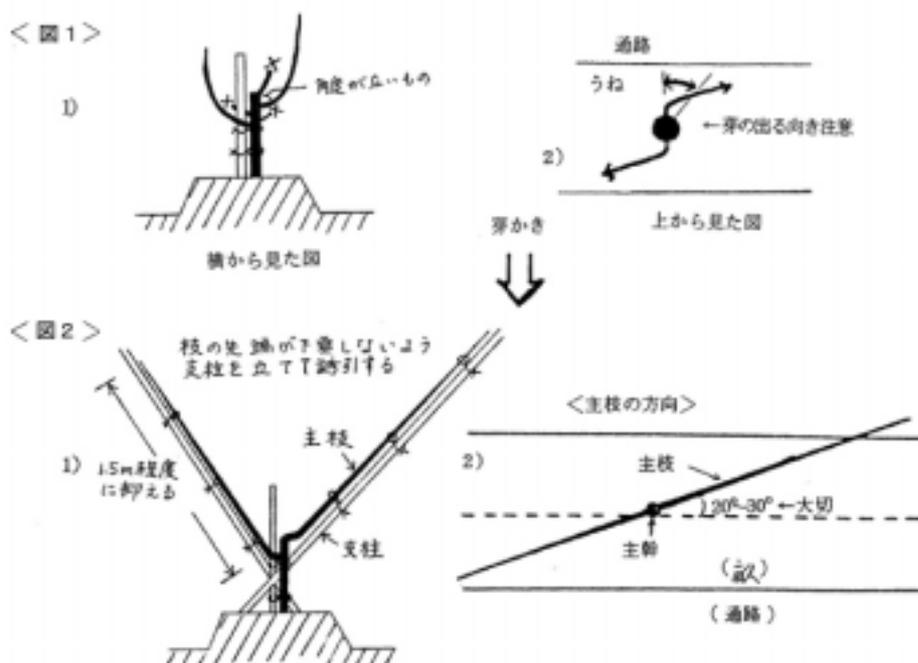
植穴は、深さ30cm程度で、根を四方に配置し、深さ10cm程度の浅植とします。植穴には堆肥等を混和し、化成肥料は、新梢の伸び具合を見て追肥で行います。苗木は、40cm程度のところでせん定し、支柱を立てて結束します。植え付け後は、敷きわらか黒ポリマルチをして土壌の乾燥を防ぎます。

## 四 植え付け一年目の管理

新梢が20cm程度伸びた頃（六月上・中旬）に発生角度が広く、左右の勢力・方向性が良い新梢二本を主枝候補として残し、他はすべて芽かきをします。一番上の芽は発生角度が狭いので使用

しません。（図1 1・2参照）

主枝は、畝方向に対して20°～30°の角度をとって支柱を立てて誘引します。（図2 1・2参照）七月下旬頃に新梢が停止し、長さ150cm・太さ10円玉程度に抑えるのが良いでしょう。冬は、防寒対策としてわらなどを巻きます。



## 「ちばエコ人参」出荷始まる

「山武都市農協人参部会もっと安心農産物生産グループ」では、本年度から「ちばエコ人参」の生産をスタートさせました。

千葉県では消費者に安心・安全な農産物を届けるために、産地で栽培された農産物に県独自の認証を行う「ちばエコ農業」推進事業を行って



おり、秋冬人参としての品目認証を受けたものが今回ご紹介する「ちばエコ人参」です。認証を受けるには県が定める技術基準に比べて農薬や化学肥料を1/2以下にしなければなりません。そのため十分な収量を上げるには生育を見極めた管理が重要となります。今年度は、118名の生産者（約35ha）が「ちばエコ人参」に取り組み、当初の予想を上回る栽培面積となりました。

栽培にあたっては、「人参の前作に堆肥を投入する」または「緑肥作物と輪作する」などの土づくり技術を生産者全員が行いました。また統一栽培暦を作成し、肥料、農薬などの選定を行いました。特に減農薬対策として、地域全体でフェロモントラップの設置を申し合わせました。

今年の生育は順調で心配された病気も少なく、一般栽培に比べてそんな色ない「ちばエコ人参」が順次収穫期を迎えています。「ちばエコ人参」は一般の人参とは区別され「ちばエコ農産物」のロゴマークと生産情報が印刷された小袋に詰められて大手量販店や市場に出荷されます。



## フレッシュ・ニューファーマー

### 松尾町 有田早苗さん

松尾町の産業祭。懇意にしている4HクラブのIさんに、有田さんが「ブルーベリーを作りたい」と打ち明けたのは2年前のことでした。そして今、晩秋を迎えて紅葉を始めたブルーベリーの苗木たちを背に「ここまでできたのは、皆さんが背中を押してくれたおかげだと思います」と話をつなげました。



2年前、子育ても一段落し、有田さんはこれからの生活について思いを巡らしていました。親御さんの側にいてあげたい、年をとれば自然と人付き合いも減っていくが寂しい生活にはしたくない・・・

家にいて人が来てくれる生き方として思いついたのはブルーベリーの摘み取り園でした。しかし、農家の生まれとはいえ、それまで農業に携わったことのない有田さんには雲を掴むような話。確たる勝算も無いまま、おそろおそろ産業祭で話を切りだしたのでした。

縁は異なるもの、Iさんはブルーベリーで有名な玉田先生(元・農業大学校)の教え子だったことから歯車が回り始めました。農業大学校・普及センターから実際の生産者やピートモスの業者まで、人のつながりがどんどん広がっていききました。そして、何より有り難かったのは、園地の造成や苗木の定植に親類の皆さんが手伝ってくれたことでした。

2年後の初収穫に向けて、今は準備に大忙しです。摘み取りプラス加工もしたい、特技の草木染めや手芸を活かせないだろうか？夢の実現には鍬や草刈り機の練習も欠かせません。晴耕雨読の日々が続きます。

モットーは「ブルーベリーとともに若返る」。そういえば最近、小じわが減ったような・・・